

日本藻類学会第 41 回大会参加記

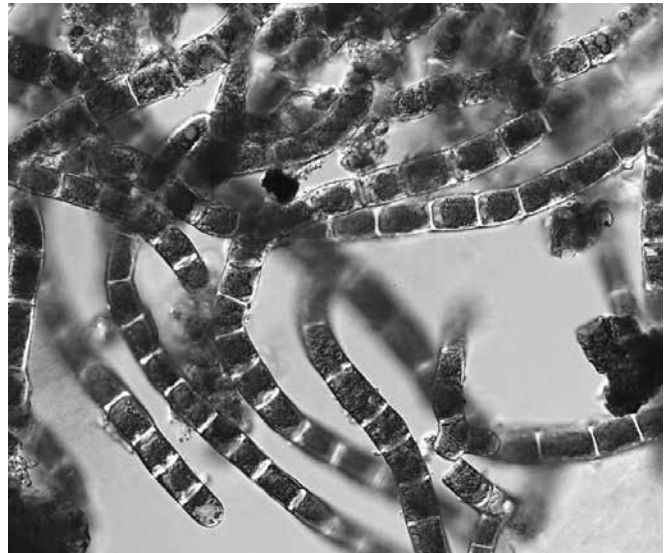
ワークショップ「クロレラと気生藻の魅力 – 採集・観察から 分類・バイオマス生産」参加記

中村 憲章

私は、日本藻類学会第 41 回大会にて開催された気生藻、そしてクロレラについて学ぶワークショップに参加することで、表題のとおり、これらの藻類の魅力を実感することができた。

本ワークショップは講義編と実習編に分かれて開催された。私は専ら珪藻を研究しているため、短い時間の中でクロレラや気生藻についてどれだけ学べるだろうかと多少の不安を感じていたが、それは杞憂であった。講師の方々はそれぞれの専門を非常にわかりやすい言葉で講義され、どれもが私が知らなかった多様な切り口から対象とする藻類の魅力伝えるものであった。そのおかげもあり、1日ですべて多くを学び、興味の幅を大きく広げることができたと感じる。その中で、長浜バイオ大学の保科亮先生が行ったクロレラについての講義が印象に残っている。クロレラの発見から分類手法の大きな転換といった歴史の流れから、共生藻としての成立過程といった先端の研究までを伝える魅力あふれる内容であった。特に共生藻としてのミドリゾウリムシとの関係性は研究材料としてクロレラへの興味を掻き立てられるものであった。また、東京大学の田修平先生が行った、トレボウクシアの生物資源としての有用性の講義も、藻類をどのように活用していくかという視点で今後の研究のヒントを与えてくれた。

翌日の実習では、高知大学構内や近隣の神社などで気生藻の探索を行った。広島県環境保健協会の半田信司先生の前日



採集されたピロードスミレモ

の講義を通して、気生藻の形態や生態については学んでいた。しかし、実際の現場で観察を行うことは強い感動を伴うものだった。一見すると汚れにしか見えない部位を、半田先生に指示されるまま、ルーペで覗くとそこにはたくさんの見たこともない藻類の世界が広がっていた。中でもスミレモは鮮やかな金色に輝いており、私たちが何気なく見逃している中にこのような美しいものがあることに気づかされた。強く印象に残っているのは神社の鳥居を見上げた時のことだ。小さな鳥居にも関わらず、場所ごとに異なった色が散らばっていた。もしか、と先生に伺ったところ、部位によって異なる藻類が付着しているという。風や光のちょっとした当たり方によって、優占する種が大きく異なっていることに、藻類研究の面白さを改めて感じた。

私は珪藻を研究しているため、水辺に行くにつれ珪藻が付着している場所に目が行ってしまう。だが、今回のワークショップで気生藻の魅力を知った今は、陸の上を歩きながら、気生藻にも目が行くようになった。私に改めて藻類の奥深さを教えてくれた今回のワークショップは今後、私が藻類に関わっていく中で貴重な経験となるに違いない。

最後に、本ワークショップで講師を務めてくださった先生方、世話人としてワークショップを企画された河地正伸先生に感謝申し上げる。

(福井県立大学大学院)



野外観察の様子